
Re:FRain Online

本知そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re:FRain Online

【Nコード】

N6577Y

【作者名】

本知そら

【あらすじ】

同時接続者数国内最多を誇る純国産MMORPG『FRain Online』。
サービスインしてから十年が経った今なおトップに君臨し続けるそのゲームを運営するRinged World社が、数年振りの新作を発表する。

その名は『Re:FRain Online』。
同社及び国内初のVR対応MMORPGである。

そのオープンベータテストに参加することになった主人公の遠近とあちかけい

圭は、とあることから通常のPCとは違う『NPC』としてプレイすることになる。

妹の桔梗^{ききょう}や、いとこの比与森^{ひよもり}千沙都と共に冒険を始めた圭は、高精細なグラフィックと五感を刺激する新感覚に感動しながら、ゲームにのめり込んでいく。

しかし、ある日突然、何の前触れもなくそれは彼らに襲いかかった。

VRMMORPG（ログアウト不能）物です。また、擬似的ではありませんが主人公が♂。♀となっています。

ブローグ

……。

いつから私はここにいるのだろう。

数ヶ月前だったような気がするし、数時間前だったような気がする。

何も見えない、何も感じないこの真っ暗な場所は、私の時間の感覚を壊していく。

いや、時間の感覚だけではなく、五感そのものが壊れていく。

どこまでもどこまでも暗闇が続き、その中でただただ漂っているだけの私。

別に無気力だとか諦めたとか、そういうわけでは決していない。

むしろ私は今も、なんとかしてここから出ようと無様に足掻いている。

けれど、私の体は決して動かない。まるで私の体ではないかのよう。

それでも諦めない。だから私は心で叫ぶ。

——誰かそこにいますか？

……。

——誰かそこにいますか？

……。

何も返ってはいない。そこに誰もいないのか、それとも……

——私の声は聞こえますか？

……。

——。

……。

やはり何も返ってこない。けれど私はその先を続ける。

——そこにいるかもしれないあなたへ。

——伝えて下さい。私は生きている、と。

——私はここにいます、と。

……。

——私は戻らないといけない。戻って、会わないといけない人がいるんです。

——だから、お願いします。

——私はここにいます。

……。

……。

暗闇と静寂が私を支配する。

やはり私の声は誰にも届かないのだろうか。

だとしても、

たとえ私の行動に意味がないとしても。

それでも私は、きっといつか、この声があなたに届くと信じて。

今日も私は、この暗闇から叫び続ける。

——そこにいないあなたへ。

——私はこれからもあなたを呼びます。呼び続けます。

——私の声が、いつか届く、その日まで。

——だから、

——いつかここへ来るあなたへ。

——私はここにいます。

第1話 ロゲイン part 1

「あぢい……」

燦々（さんさん）と光り輝く太陽が、じりじりと俺の体を焦がしていく。

空を見上げれば、雲一つない青い空がどこまでも広がっている。学校の教室や体育館、トイレや廊下にまで空調設備が整った昨今の快適な環境にどっぷりと浸かってしまっている俺達世代には、連日続くこの猛暑は非常につらい。

額に滲んだ汗が頬を伝い、真っ黒なアスファルトへポタリと落ちる。ジユツと短い悲鳴が聞こえて、瞬く間に蒸発してしまった。

これ、肉焼けるんじゃないか？ と、熱にやられ気味の頭で思う。たぶん最近麺類ばかりが食卓に並ぶせいで、脳が肉を欲しているのだろう。

今朝、家を出る前に見た天気予報を思い出す。

『七月二十四日。天気は晴れ。最高気温は三十八度。今日も猛暑日となるでしょう』

視聴者の心のオアシスとなるお天気お姉さんのあの笑顔も、今は酷く憎たらしい。

「うわっ」

持っていた棒付きアイスの最後の一口が、この夏の暑さでドロツプアウトする。

……俺だってこんな暑いなか頑張ってたから、少しは根性見せろよ。

平べったい木の棒を手に持ち、アスファルトに横たわる青い氷菓子を見つめる俺。端から見れば、とてもとても哀愁漂う光景だろう。

「なあ、桔梗。アイスクレ」

悔しいので隣を歩くやたら小さい少女に新しいのをねだる。

「さっきのもう食べたの？」

棒付きアイスを一生涯懸命に舐めていた少女が小首を傾げて俺を見上げる。

少し目尻が上がり気の強そうな印象を受ける大きな目に、桜色の唇をした小さな口。黒い髪は肩で切り揃えられ、肌は透き通るように白く、手足はほっそりとしている。そして申し訳程度に自己主張する胸に、俺より頭二つ分以上小さい小柄な体。

年相応にうつすらと化粧を施したあどけない少女は、紛う方なき俺、遠近圭の妹。とおちかけい今年高校生になったばかりの遠近桔梗だ。とおちかききょう

「食べたというか、アイスの野郎に根性がなかったというか」

「……どういうこと？」

さらに首を傾げる桔梗。妹がなかなか可愛い。

「敵はこの夏の暑さ」

桔梗が振り返り、屍と化した青い氷菓子を目にする。

「溶けちゃったってことか。はい。これで最後だからね？」

桔梗がドライアイスの入ったビニール袋からアイスを取り出す。

「さんくす」

礼を言っ受取り、すぐに包装を引剥がして齧り付く。お馴染みのサイダー味が冷たさと共に口の中に広がる。

そういえばと、視線を桔梗に向ける。

大量の紫外線が降り注ぐ太陽の下、ノースリーブの白のブラウスと黒の膝上丈スカートという夏らしい出で立ちの桔梗は、その白い肌を大きく露出していた（主に肩から先）。

「日焼け大丈夫なのか？」

「ふえ？ ……あー」

一瞬桔梗がきよんとするが、すぐに理解して、

「うん。ちゃんと日焼け止め塗ってあるから」

そう言い、「ありがと」と微笑んだ。

「そうか、それなら良かった」

その笑顔に心を癒やされながらも意地悪心が働いた俺は、つい口を滑らせてしまう。

「お前がそのなりでこんがり日焼けしたら小学生にしか見え——」
「あはは、お兄ちゃん。そんなにも晩ご飯に毎日酢の物が食べたいんだ」

「すみませんタコと酸っぱいのは勘弁してください」

若干こめかみの辺りに青筋が見える桔梗にすぐさま頭を下げ、誠意を持って謝罪する。

食卓の全権を桔梗に握られている手前、あまり桔梗を起こらせるのは得策ではない。酢酸とタコはこの世から消えれば良いのに。

自分の姿に多少のコンプレックスを持つ桔梗は、そのコンプレックスの要因である容姿と人柄の良さで学校でもなかなかの人気者で通っている。見た目は小さくて可愛くマスコットのよう。けれど成績はいつも上位をキープする頭の良さ。そして困っている人がいれば迷わず手を差し伸べる優しい性格に、趣味は料理と裁縫という家庭的な面も持ち合わせている。いやあ、クラスにこんな子がいたら真っ先に告白してますよ奥さん。

そんな人気者の桔梗は、高校生になってからよくラブレターを貰うらしい。

最初に貰ったのは桔梗が入学して僅か一週間後のことだった。当時「げ、下駄箱に手紙が入ってたっ!？」と酷く動揺した様子の桔梗に、気持ちよく夕寝（晩ご飯前の夕方に寝ること）していたところをたたき起こされたのを覚えている。

最近では週一くらいのペースでラブレターを貰うらしいのだが、それも桔梗の人気を考えれば致し方ない。むしろラブレターを貰ってなかったら「お前らの目は節穴かつ!」と教室まで怒鳴り込んでいるところだ。

ちなみに今のところは色恋沙汰に興味がないようで全て断っている。兄としては、もったいないようなほつとするような、複雑な気分だ。

……とまあ、妹の話はここまでにしよう。シスコンと疑われては困る。

しばらくアイスをガリガリと嚙りながら歩道を歩いていると、大きな日傘を差した大学生くらいの女の人とすれ違った。

すっぽりと影に覆われた彼女を見て、『桔梗も日傘を差せば良いのに』と、ふと思う。

そのまま彼女を目で追い、首がきつくなってきたところで視線を戻す。

隣から強烈な視線を感じることに気付く。

「ん。どうした？」

何故か睨むように俺を見上げる桔梗がぼつりと呟く。

「やっぱりお兄ちゃんも大きい方が良いの……？」

大きい？ ……ああ。そういえばさっきの女の方は胸が大きかった……ような気がする。たぶん。きっと。人自体よりも傘を見ていたから覚えていない。

自分の体にコンプレックスを持つのはみんな同じ。桔梗も、身長以外に女子ならその多くが持つという悩みを抱えていたのか。

よし、ここは兄として励ましてやろう。

「まあまあそう落ち込むな。男全てが大きい物好きというわけじゃないぞ？ なんせ俺は小さい方が好きだからな」

ちよつと自分の性癖をばらしているようで恥ずかしい。

「そ、そうなの？ でもさっきの人じつと見てたけど……」

「あれはお前も日傘差せばいいのになー、と見てただけだよ」

「お、お兄ちゃん……」

桔梗が胸の前で手を合わせて目を輝かせる。妹がなかなか愛らしい。

無垢な瞳で見つめられ、気恥ずかしくなってきた俺は、それを隠すようにちよつとぼけてみる。

「……が、すまない妹よ。俺はお前の兄。恋人とかフィアンセとか、そついう甘々な関係にはなれないんだ。法律とか周りの目とか、主

に俺のアイデンティティ的に。だから他に俺と同じ趣向を持つ相手を見つけてくれ」

「——っ！ な、なな、こ、恋人って、お、お兄ちゃんに言ってるのっ！？」

軽い冗談なのに、何故か桔梗は顔を真っ赤にしてドライアイスを投げてきた。

あるえ〜？ 俺の予想だと『何言ってるのお兄ちゃん。あはははっ』と笑い飛ばされるはずだったのに、どうしてこうなった。理解不能だ。

とりあえず固形物のドライアイスが鼻に当たって涙出そうなんだがどうしよう。

第1話 ログイン part 2（前書き）

（数字）が付いた語句は、後書きで簡単に説明しています。

第1話 ロゲイン part 2

目の前の自動ドアが開き、ひんやりとした空気が体に触れる。はあ、と体内の熱気をはき出すように大きく息を吐くと、幾分かさつきまでより体温が下がったような気がする。

「ふう。すずし〜」

桔梗がブラウスの胸元を摘んでパタパタと風を送る。

「やめとけ桔梗。ここは病院だぞ」

「え？」

桔梗の頭の上に疑問符が浮かんでいるように見えたが、そんなものは無視して真剣な表情で言い切る。

「お前のその不必要な行動で病院側が意図しない気流が生まれ、院内感染が拡大したらどうする？」

お手軽簡単バイオハザード。そんなことで感染したら今頃人類は滅亡している。

「う、うん。分かった」

人を疑うことを知らない桔梗は、ぎこちなく頷きブラウスから手を離す。

「……ふう。これでよし。」

心の中で安堵のため息をつく。

兄にチラリズムは止めてくれ。いろいろと毒だ。

「そういえばお兄ちゃん。同意書は持ってきた？」

「ああ。ちゃんと持ってきてるよ」

ポリエステル製のシオルダーバッグから数枚の紙を取り出す。

「サインはした？ 判子も押してきた？」

「お前は俺の母親か。そんなに心配なら見てみるよ」

同意書を渡すと、桔梗はすぐさま目を走らせる。

「うん。大丈夫そう」

同意書を俺に返す。一応大事な書類なので仕舞っておこうと鞆に

手を伸ばす。

「じゃ、いこつか」

しかしその手が鞆に到着することなく桔梗の手に掴まり、グイッと引っ張られる。

「ちょ、待って」

「早く受付しないとそれだけお兄ちゃんの番が遅くなるんだよ？
ほら、早く早く」

「分かった。分かったから離せって」

「いやっ」

急かす桔梗に無理矢理引っ張られ、玄関正面にある端末の前まで来る。俺の代わりにその端末を操作し受付を済ませると、端末から番号の書かれた紙が出てくる。それを受け取り、画面で指示された場所へ向かう。

手を引かれ、前に行く桔梗の背中を見つめながら思案する。

病院についてから明らかに桔梗の歩く速度が上がっている。それほどまでに彼女は『アレ』が待ちきれないのだろうか。まあ俺も少なからず『アレ』には期待しているのだが。

目的の場所までたどり着き、番号の書かれた紙を受付の看護師さんに渡す。

ちやうど混んでいなかった時間のようで、すぐに名前を呼ばれた。診察室へと入ってきた俺と桔梗を見て、「ああ、君たちか」と四十歳くらいと思われる医者が微笑んだ。

「同意書は持ってきたかね？」

「はい」

両親と俺のサインが入った同意書を医者に渡す。

「……大丈夫のようだね。ではすぐに治療を始めるけど、ご両親は来ていないのかね？」

「俺と妹は山間部の方の出身で、こっちの学校に通うために今は親戚の家から通わせて貰っているんです。ここから実家までは結構距離があるし、両親は仕事が忙しいようなので、遠慮して貰いました」

「そうか。分かった。まあこの治療は他の治療法よりもリスクが極端に低い。同意書なんて大仰な物を書かせてしまったけど、心配なんてまったくする必要はないから安心してくれ」

同意書には『数万分の一の確率で後遺症が残る可能性があります』云々（うんぬん）等のこれから受ける治療の危険性を訴えていた。とは言えそれは、歩いていて交通事故に遭うくらいの確率だったのだ、まあよほど運が悪くない限りは大丈夫だろうというものだった。それでも医療という物は常に死と背中合わせの業種。万が一のことを考え、同意書という物が必要なのだろう。

医者がカルテに何かを書き込み、それを看護師に渡す。

「では遠近さん、こちらへ」

看護師さんに付き従って診療室を出た。

数日前のことだ。

『タダで健康診断受けられるから行ってきたさい』と、地域の広報誌を見た母さんから電話を受けた俺と桔梗は、渋々遠路はるばる実家近くの病院へとやってきた。

せつかくの夏休みを初日から潰されるなんてと、桔梗と愚痴りつつ一日かけて体の隅々まで検査を行った結果、なんと俺のレントゲンにだけ小さな黒い影が映っていたのだ。

たいしたことではないと思うが、という前置きをしたうえで、一応両親にこのことを話したいという医者要望により、翌日には仕事を休んだ両親とともに病院を訪れた。桔梗と両親を交えて医者と話をしたところ、この黒い影は俺の年齢からすると、まったく気にしなくても良いものらしいが、完全に陰性と決めつけるに至るものでもなく、心配であれば治療を受けてみてはどうかということだった。もし治療するならと勧めてきたのは、ソーク療法という聞いたことのないものだった。

ソーク療法とは、人の身体を正常な状態へと修復する特殊な液体で満たしたカプセルの中に入って、数日から数ヶ月かけて病気を治療するという最新の治療法だった。この治療法は通常の施術よりも時間はかかるが、後遺症もなく傷も残らないという極力体に負担をかけないというメリットがあり、子供から年配の方まで誰でも受療可能なものらしい。ちょうど夏休みに入ったばかりだったこともあり、心配性な両親は二つ返事で俺にその治療を受けさせることを決めた。

そんなわけで、俺は今日からその治療を受けるために、学校近くにある有名な病院へとやってきた。健康診断を受けた地元の病院ではソーク療法は受けられず、紹介されたのがこの病院だった。

『お兄ちゃんのことがか心配だから』

そう言っ て付いてきた桔梗だが、本音は別の所にある。

それは……

「はい、桔梗ちゃん。頼まれていたものよ」

「あ、ありがとうございます！」

嬉しそ うに看護師さんから受け取ったのは、最新型のヘッドマウントディスプレイ（１）と一枚のメモ用紙だった。

俺は大き くため息をついて、ヘッドマウントディスプレイを抱きしめる桔梗に視線を向ける。

桔梗が抱きしめるヘッドマウントディスプレイは従来のただ映像を見るためのものとは少し形状が違い、より薄型で、より頭に密着するような構造になっているようだった。また電極パッドのようなものがいくつかあり、コードでヘッドマウントディスプレイと繋がっている。

あれがVR（２）対応のヘッドマウントディスプレイか。実物を見るのは初めてだ。あの電極を頭部や首筋に張ること で、その電

極が脳波を受け取り、また電波信号を送ることで、ヘッドマウントディスプレイ自体から得られる情報と合わせ、仮想空間を五感で体験可能とするものらしい。

先月から日本でも市販されるようになったばかりの最新機器であり、かなり高額なため一家に一台とはいかない代物だ。それをこの看護師さんがひよいと貸してくれたのには理由がある。

それは看護師さんから受け取ったもう一方のメモ用紙に書かれている英数字にある。

そこに書かれているのは『Re：FRain オンライン』のオープンベータ参加用シリアスナンバーだ。

『Re：FRain オンライン』とは、Ringed World社が現在もサービスを続けている『FRain オンライン』の新作であり、同社が初めてVR技術を使用した、五感全てで体感できる新感覚MMORPG（3）だ。

『FRain オンライン』はサービインしてから十年たった今でも国内で最も同時接続数の多い純国産MMORPGであり、その高い知名度から、一年前に新作発表会で『Re：FRain オンライン』が紹介された際には、国内初のVR対応MMORPGということもあつて、それはもう凄い反響を呼んだ。

それから約一年が経過した明日。幾度かのクローズドベータを経て、ついにその新作がオープンベータ（4）を開始するのだ。

この前、ソーク療法を受けるための事前診断を受けに病院へ来た際に、俺と桔梗は順番待ちの空き時間に、そのオープンベータについて盛り上がっていた。

純国産としては初のVR対応MMORPGであり、またクローズドベータの評判も上々と言うこともあつて、俺も桔梗も『Re：FRain オンライン』には並々ならぬ思いを寄せていた。ただ、

『Re:FRain online』をプレイするにはVR対応のヘッドマウントディスプレイが必須だった。一般庶民な俺達にそんな高価な代物があるはずもなく、そのせいでクローズドベータもオープンベータも泣く泣く応募を取りやめたのだ。

それでもやっぱりプレイしてみたかった俺達は、近くのネットカフェに通い詰めてでもプレイしようかと話していたところ、ちょうど通りかかったこの看護師さんが、知り合いにRinged World社に勤めている人がいること、そしてその人からVR対応ヘッドマウントディスプレイを貸し出すので、『Re:FRain online』をプレイして感想を聞かせてくれる人を探してほしい、と頼まれていることを俺達に話した。

それに食い付いたのは俺よりも桔梗だった。

『目に入れても痛くないどころか快感です』の妹だが、唯一困ったところがあった。それがこのネトゲ（5）だった。

元々は、いつも俺にべったりだった桔梗が、『FRain online』をプレイする俺を見て興味を持ち、やり始めたのが最初だった。一度はまると飽きることなく長く続ける質^{たち}の桔梗は、すっかりネトゲにはまってしまい、以来暇さえあればパソコンに齧り付き、深夜までネトゲをプレイするようになった。俺よりも接続時間が長くなり、俺よりもめり込んでしまった桔梗をさすがに心配になってきた俺は、何度か桔梗をネトゲから離そうと思ったのだが、成績は下がらないわ友達との付き合いはちゃんと続けているわ親には隠し通すわで、注意するべきところが見当たらず、結局ずるずると今日までできてしまった。

目的の物を受け取った桔梗は、看護師さんに何度もお礼を言った後に、^{のち}

「それじゃ、私は明日のオープンベータに間に合うよう、家に帰っ

てこれをセッティングするから、お兄ちゃんも明日ちゃんと遅れずに来てね！」

そう言い残して帰って行ってしまった。

……俺がソーク療法を受け始めるところを見送りもせず帰るとは……。

ちよつと寂しくなった。これから約30日間ほど会えなくなるというのにこの素っ気なさ。案外俺って妹にとってはどうでもいい存在？

ちなみに桔梗が言っていたように、俺も明日からのオープンベータには参加することになっている。

このソーク療法に要する時間は約30日。夏休みのほとんどを使うことになるらしい。その間ずっと俺はカプセルの中で、ただプカプカと浮いているだけらしく、さすがにそれは暇すぎると思うことで、なんと治療中に『Re:FRain online』をプレイ出来るようにしてもらった。実は俺の担当医もあの看護師さんの知り合いと友人らしく、せっかくだから兄妹きょうだい一緒にと、桔梗の分とは別に俺用のVR対応機器を用意してくれた。さすがにカプセル内にヘッドマウントディスプレイを持ち込むのは無理なため、特性の電極を使用して五感全てを直接脳に送り込む特別仕様にして、治療中でも他のプレイヤーと変わらずプレイできるようにしてくれた。

しかも俺には特別な役回りを、そして特別なキャラを使わせてくれるという。

さっき感じた寂しさはどこへやら。俺はつきつきしながら、看護師さんの後について、廊下の角にある部屋へと入っていった。

第1話 ログイン part 2（後書き）

1 ヘッドマウントディスプレイ：略称はHMD。頭部に装着する表示装置。一般的に市販されている物は大画面を体感できるディスプレイとして使用されている。

2 VR：バーチャルリアリティ。仮想現実。人工的に作り出した映像や音響から、現実感を作り出す技術。

3 MMORPG：Massively Multiplayer Online Role-Playing Gameの略。多人数同時参加型オンラインRPG。国内産の代表作としてはFinal Fantasy XIなどが挙げられる。

4 オープンベータ：オープンβとも書く。正式サービス前の負荷テスト等を兼ねて行う、無料でプレイができる期間のこと。ごく一部の人しかプレイできないクローズドβとは違い、基本アカウント登録ができれば誰でもプレイ可能。ゲームによってはオープンβからそのまま正式サービスへ移行するものもある。この期間に不具合やバグ、サーバーの初期化等があっても正式サービス期間ではないため基本プレイヤーは文句は言えない。

5 ネットゲ：ネットゲームのこと。インターネットを介して遠くの人とゲームができる。

第1話 ログイン part 3

やたらでかい試験管のような形をしたカプセルに入ると、ビーという警告音が鳴り響き、それから数秒後に足元からゴポゴポとちよつと粘着質な液体が溢れてきた。水攻めよろしくゆっくりと足から順に、腰、肩、そして頭と水面が上昇していき、やがて頭の先まで液体に浸かる。

浮遊感がして、体が僅かに水中に浮く。それはかなり気持ちよくて、ぼーっとしているとそのまま寝てしまいそうだった。

『どうだい調子は？』

脳に直接医者の声が響く。どうやら『Re:FRain Online』をプレイするためにと頭に突き差した電極を介して話しかけているようだ。

閉じていた目を開ける。隣の部屋からガラス越しにこちらを見ている医者と目が合う。

『SFみたいで心拍数が当社比1.5倍です』

ちゃんと手首で脈を測りながら応える。1.5倍自体は適当だ。

呼吸のための酸素マスクには外部との連絡用に小型マイクが内蔵されているらしい。俺の声はちゃんと医者に届いたようで、彼は微笑みながら頷いてみせた。

ああ。念のために言っておくが、今の俺は全裸じゃない。一枚ちゃんと羽織っている。残念っ。

『順調そうだね。それなら後は君の自由にしてくれて構わない。そのカプセルの内側にあるボタンを押せばゲームが始まるようになっている。楽しんできてくれたまえ』

そう言い残して、医者は部屋を出て行った。

学校の教室くらいの大きさの部屋に一人取り残される。眠気が少しあったので、一瞬このまま寝てしまってもいいかと思ったが、明日には桔梗と『Re:FRain Online』内で合流する手

筈になっている。すぐにログインできるようにキャラクターを作成しておかないと。桔梗はすねると後が大変だから遅れるわけにいかなかった。

オープンベータ自体は明日からなのだが、俺だけは今日からログインできることになっていた。とはいえ、できるのはキャラクター作成まで。なんでも、最後の調整が必要なので、キャラ作成即プレイができないらしい。俺だけが今日ログインできるのは、そのための限定的な措置らしい。

俺はさっそくゲームを始めてみることにした。医者が言っていたボタンを押すと、ふっと目の前が真っ暗になり、数秒後にRinged World社のロゴが現われた。

なるほど。直接脳に映像が流れ込んで来るから、ゲームを始めるとゲーム内の映像しか見えなくなるのか。たぶん、耳や鼻、その他五感全てがそうなるのだろう。

いくつかの企業のロゴが流れ、やがてオープニングムービーが始まった。

二枚の抽象画が現われ、その一方に火が付き、燃えていく。残った方の絵から涙が零れ、そして絵そのものも光の粒となり大地へと降り注ぐ。一度映像が暗転してから、とある賑やかな街の市場の様子が映し出され、活気ある光景が流れる。そして突如戦闘シーン。巨大なゴーレムに立ち向かう五人の人間。一人が片手剣と盾を持ち、敵を引きつけてゴーレムの攻撃を凌ぎ、一人がゴーレムの背後から両手剣を繰り出す。一人は本を片手にゴーレムから距離を置いて魔法を詠唱し、ゴーレムの頭上に巨大な氷の塊を召喚する。一人は一番遠くから魔法を詠唱し、盾を持ったキャラに回復の魔法を発動させる。そして最後の一人はピンツと親指でコインを上へはじき、それを銃で狙いを付け、撃ち出した弾丸で貫いた。

そこでムービーは終わり、視界に大きく『Re:FRain O

n l i n e』のロゴが現われた。

よく動くCGで作られたそのムービーは、この『Re：F R a i n O n l i n e』の創世から現代にまつわる物語だった。

要約すると次のようになる。

遙か古の時代^{いにしえ}、いつの頃から始まったか定かではない神々の争いは、悠久の時を経て、女神ケイレスの勝利で幕を閉じる。長きに渡る戦争で荒れ果てた大地を見たケイレスは、自分達のおかした過ちに気づき、深く後悔し、涙した。やがて女神は自らの命を引き替えにして世界の再生を願った。それから数千年の歳月が過ぎ、神々のいなくなった世界は、豊かな自然に育まれた大地へと再生を果たした。世界は新たに生まれた五種族の人間といくつかの魔族が文明を築き、互いに小競り合いを繰り返しながらも、その繁栄を謳歌していた。しかしそんな平和な世界にも、ゆるやかに、だが着実に、闇の足音が近づいてきていた。

とまあ、こんな感じだ。つまりそこそこ平和だった世界に何かよからぬことが起こるので、それをなんとかしろ、というのが俺達プレイヤーの役目、といったところだろうか。王道だな。

オープニングムービーが終わり、視界が暗転する。しばらく待っているときャラクター選択画面が出てきた。まだ一キャラも作っていないため、そこには誰もいない。

たしか、話ではこの画面で待っていると……

『もしもし。こんにちは』

話に聞いていた通りに、男の声が聞こえる。

『こ、こんにちは』

ん？ 少し話づらい。それも仕方ないか。口を動かさず、考えるだけで言葉になるなんて初めてのことだ。

頭の中で会話するというのはなかなか難しい。慣れるまで少しばかりそうだ。

『君が遠近君だね？ ようこそ『Re:FRain Online』の世界へ！ アンドこの度はオープンベータテストにご参加頂き、誠にありがとうございます』

『い、いえ。こちらこそ、妹の分も合わせて二台もVR機を貸して頂いて、ありがとうございます』

最初と最後のテンションが大きく違う。それに動揺しながらこちらも挨拶を返す。

『なんのなんの。聞けば君たちは前作もプレイしてくれていたらしいじゃないですか。しかも調べてみたら、ミッションクエストは全てクリア、クエストもそのほとんどを網羅。君達からなら良い感想が聞けそうで、期待しています』

『あ、はい。期待に応えられるよう頑張ります』

姿は見えないが、お互いがペコペコと頭を下げる姿が思い浮かぶ。『さて、話はこれくらいにして、本題に入りましょうか。以前に話してある通り、君にはこの『Re:FRain Online』のストーリーに深く関わる『ミッションクエスト』の重要人物となってもらうため、特別仕様のキャラクターを使ってもらうわけですが……この場合、『Re:FRain Online』の売りでもある多彩なキャラクターエディットができず、あらかじめこちらが用意したキャラクターになります。それでもよろしいですか？』

『はい』

別に普通に始めたいのであれば、正式サービスの折に新しく作れば良い。せつかくの特別仕様というキャラを使う機会を逃す手はない。それにしても、ミッションクエストの重要人物か。特別な役回りとは聞いていたけど、まさかそんな重要な役とは……。今から楽しみだ。

『分かりました。ではキャラクターの名前、そしてセカンドクラスを決めて下さい。それ以外の項目は既に決まっていますので』

名前か……。よし、せつかくだから、

『じゃあ名前はブロン——（１）』

『申し訳ないですが、真面目にお願いします』

うぐつ。なぜこの三文字でネタだと分かったのか。まあそこそこの有名だったから社員も把握していたのかもしれない。

『済みません。ではトウヤで』

この名前は俺が『Rain Online』をプレイしていたときに使っていたものだ。慣れ親しんだ名前であり、これならネタでもなんでもないからスルツと通るだろう。

しかし、

『言い忘れていましたが、君が使用することになるキャラクターは『少女』です。なのでそれに合った名前をお願いします』

『なっ……！？』

し、少女だと……っ！？

なんてことだ。今まで男のキャラクターでしかやってこなかった硬派な俺が、まさか少女のキャラクターを使うことになるとは……。

『じゃあサイカで』

『サイカ、ですね。分かりました』

予め決めていた名前を告げる。いや別に『今回は少女のキャラクターでやってみようかな』なんて軟派なことを考えていたわけではない。偶然だ偶然。偶然ネットで情報を集めていたら、『Rain Online』のキャラクターの画像を見つけて、それがやけに可愛くて、気付いたらそれに合う名前を探していただけだ。

『では次にセカンドクラスを決めて下さい』

セカンドクラスとは、たしか『Re:Rain Online』の職業システム『ツインシステム』に関わるものであり、通常使用するファーストクラス以外にもう一つクラスを指定して、場面によってファーストとセカンドをチェンジできるというものだ。「後衛ばかりでアタッカーと盾はどうしよう」とか、「前衛ばかりで回復と支援はどうしよう」というお悩みの時に、セカンドクラスにチェンジすることで、スムーズにゲームが進行できるというものらしい。

ただし、もちろんセカンドというくらいだからいろいろと制約があるらしく、ファーストとして使用したときよりも性能は落ちるのだとか。まあつまりは『非常時用』のクラス、といったところだ。

『ファーストクラスはギャンブラーです。また、セカンドクラスに同じ系統のクラスは選べません』

ずらっと並ぶクラスからセカンドクラスをどれにしようかと思いつく。

防御力が高く、パーティの盾となる通称『盾職』のパラディン、ディフェンダー、ラウンダー。

攻撃力が高く、パーティの重要なダメージソースとなる通称『近接職』のダークナイト、バーサーカー、ローグ、フォロワーと『遠隔職』のアーチャー、ウィザード。

自分やパーティの能力を底上げする通称『支援職』のミンストレル、ギャンブラー。

自分やパーティのHPを回復し、ある程度の支援もこなす通称『回復職』のプリースト、アルケミスト、マテリアライザー。

いつもは回復職で初め、その後近接や遠隔の攻撃職に手を伸ばす俺なのだが、今回は今までやったことのない支援職らしい。

『ギャンブラー。特殊なコインを使用して様々な効果を付与する支援職。武器は片手剣と銃が装備可能であり、自身の支援効果を合わせると攻撃職に迫るダメージをたたき出す』か。

ミンストレルが回復職寄りの支援職とすると、ギャンブラーは遠隔職寄りの支援職といったところだろう。

立ち回りによってはサブアタッカーになれる。うん。いいかもしれないな。

『ちなみにここだけの話ですが、ギャンブラーのセカンドにはウィザードかアルケミストがお勧めです』

『ほうほう……』

関係者がお勧めということとは……何か隠し性能的なものがある？

ここは素直に従っておいの方が良さそうだ。

『ではウィザードで』

『ウィザードですね。では確認します。名前は、サイカ。クラスはファーストがギャンブラー、セカンドがウィザード。吸血鬼の少女でカメラリア皇国からスタート。これでよろしいですか？』

『はい』

後半が初耳だが、そこは仕方ない。

『それでは今日はここまでになります。特別仕様等についてはログイン後のシステムヘルプに記載していますので、そちらをご覧ください。君に少しでも何か質問等あればGM（2）までご連絡下さい。君については私が担当することになっていますから、出来る限り私が対応します。では、オープンベータの開始は、明日の午前9時からとなります。新感覚VR対応MMORPGを存分にお楽しみ下さい！』

そこで映像がプツツと途切れ、現実世界へと戻る。液体に満たされたやたらでかい試験管の中にいる俺の姿が、透明なガラスにうつすらと映っている。

結局キャラを作成しただけで、特別仕様とやらについては何も聞けなかった。ってそれどころか自分のキャラがどういうものかさえ見ていない。ずっと誰もいないキャラクター選択画面でさっきの人と話していただけなのだから。

まあいいや。これはオープンベータなのであって本番ではない。あまりに気に入らなければ、正式サービスで作り直せば済むこと。とりあえずは最低でもオープンベータの間は今のキャラでやってみるか。

明日のオープンベータ開始まであと丸一日。

よし、寝とくか。

やることもないので、この気持ちいい浮遊感に任せて眠りに付いた。

第1話 ログイン part 3 (後書き)

1 ブロンー：ブrontさん。FF XIを代表するナイト。
グラットンソードがお気に入り。

2 GM：ゲームマスター。その名の通りゲームを管理する人の
こと。不正行為やセクシャルハラスメントに対して処罰を与える。

第1話 ログイン part 4

翌日。

9時になると同時にゲームを開始した。昨日同様にRinged World社のロゴと『Re:FRain Online』のタイトル画面を経てキャラクター選択画面が現われる。

ところで昨日知ったのだが、このソーク療法という奴はなかなか凄い。何が凄いかと言うと、この液体に浸かっているとご飯は食べなくていいしトイレにも行かなくて良いのだ。医者が詳しく説明しているときに寝ていたので分からないが、どうもこの液体自体に人間が生きていく上で必要な栄養素が溶け込んでいるらしく、それを体が無意識に摂取するため、食事を取る必要はなく、また老廃物も発生しないためトイレに行く必要がないのだそうだ。

つまり、だ。このソーク療法を受けている間は、合法的に両親や親戚、その他の方々に遠慮することなくゲームに打ち込めるのだ。

これはとても凄いことだ。桔梗とは違い両親や親戚にネトゲをしていることがばれている俺にとって、「あんたゲームばかりやってないで勉強しなさい」と小言を言われないか、とか「圭、もしかして友達いないの?」と心配されないか、等と周りの顔色を窺う必要のないこの環境はパラダイスと言える。ただ一つだけ、夏休みの残り数日で宿題を全て終わらせなければならぬという問題があるのだが……まあ未来のことは考えないようにしよう。

昨日と同じように、選択画面にキャラクターの姿はなかった。ただ、誰もいない台座の下に『サイカ ギャンブラーLV1』と書かれている。

特別仕様のキャラだから表示できないのだろうか。まあ、たいしたことではないので気にせずに『サイカ』を選択してゲームを始める。

視界が暗転。数秒して眩い光に包まれる。光が少しずつ小さくなっていき、それが太陽だと分かったのはムービーが始まってからだった。

『ウルニア大陸の南東に位置する古の都、カメリア王国。』

吸血鬼の王女によって統治されたこの国は、世界でも類を見ない豊富な地下資源の恩恵を受け、近年では有数の資産国家として知られている。

カメリアの人口の9割を占める吸血鬼は、自然を愛する温和な性格をしている。そのため、カメリアは隣国と一定の距離を置き、半鎖国状態とすることで、長きに渡り平穏と平和を手にかけていた。

しかし時代は移ろい行くもの。不変を望むカメリアは次第に他国から後れを取り、やがてその領土を我が物にせんとする隣国から狙われることとなる。

それでも国民は不変を望んだ。すぐ傍にまで敵の手が伸びているとも知らずに……。

君はその古の地いにしえに降り立った、新たな希望だ。

さあ、我々の希望よ。その輝きをくすませることなく、この地を眩い光で満たしてくれ』

緑が多く残る静かで平和そうな町並みをバックに、文字が浮かび上がっては消えていく。

それにしても、やっぱり初プレイはテンション上がってくるなあ。選択した所属国家によってこのオープンングムービーは違うだろうから、全部見たくなくなってしまふ。

だがそれを実行すると、桔梗を待たせてしまうことになる。ムービーはまた今度見るとしよう。

オープンングムービーが終わり、再び視界が暗転。気付いたときには、鬱蒼とした森の中にいた。

……おかしい。周りに人がいない。

周囲の様子に首を捻る。

オープンベータ開始当日、しかも開始して数分だ。普通だったら俺が立っている付近に、ログインしたプレイヤーがあれよあれよと湧いてきてもおかしくないはずだ。

まさかログインサーバーが混んでいる、もしくは落ちている（１）とか？　ありえる。なんせ日本で一番売れたMMOの続編のオープンベータ。混雑することくらい赤ちゃんでも分かることだ。

ってことは、もしかすると桔梗もまだログインできてな――

『お兄ちゃんどこにいるの？』

突然頭の中に桔梗の声が響く。見回しても周りにはいない。一対一で会話する『テル（２）』のようだ。

聞こえたのは同年代くらいの女子の声だった。視界の左下に映る半透明のログウィンドウに『ミナト』という名前が見える。知らない名前だ。しかし俺のことを『お兄ちゃん』と呼ぶのはアイツしかない。

『桔梗か？』

『Re:FRain Online』内で現実の声が聞こえるこ

とはない。ボイスチェンジャーを通して、そのキャラに合った声が再生されるようになってる。これは個人情報的な理由もあるが、一番の理由は、男が女のキャラを、女が男のキャラを使った時に、外見とはかけ離れた異性の声が聞こえることを避けるためだ。

可憐な少女から野太い男の声が聞こえても困るだろ？

『うん。ってお兄ちゃんその声どうしたの！？』

桔梗が俺の可愛らしい声に驚いている。そりゃ驚くか。俺は今まで男のキャラしか使ってこなかったのだから。実際俺も少なからず自分が発した甲高い声に驚いている。

『特別仕様のキャラを使わせて貰えることになったのは知ってるだろ？ それでこうなったんだよ』

『そ、そっか。そういえばそんなこと言ってたね』

……テンション上がりすぎて忘れてたな？

『お兄ちゃんのキャラも見てみたいし、早く合流したいんだけど…』

…お兄ちゃん、カメラから始めたよね？』

『ああ。って、なんで知ってるんだよ？ というかその前に、なんでこのキャラが俺って分かったんだよ』

『サイカ』という名前は桔梗に教えていなかった。

『フレリスト（3）、FR（4）から引き継ぎだよ？』

フレンドリスト、か。なるほど。それなら納得だ。

『唯一の引き継ぎ要素のフレリストがさっそく役に立つとは……。知らないだろってバカにしていたのを取り消さないとな』

『そうだね。まさかこんなことになるなんて思わなかったよ』

兄妹だからいつでも連絡が取れる。そう思っていたからな。

『……ところで桔梗。フレリストってどうやってみるんだ？』

『はあ……』

ミナトのため息が聞こえる。

『公式サイトの特典リアル見た？』

『さっぱり』

『もう……。武器をしまつてスタンバイモードの状態で両手を前に

出してメニュー開いて』

『武器？ 武器なんて持ってないぞ？』

俺の手には何も握られていない。

『じゃあそのまま両手を前に出して』

桔梗に言われたとおり両手を前に出す。すると目の前に半透明のキーボードとメニュー画面が現れた。

おい。SFみたいでなんか格好いい。

『キーボードは何か文字を打つ必要があるときに使って、メニュー操作自体はメニュー画面を直接触ればいいから』

『分かった』

メニューの一覧から『フレンドリスト』を選択する。新しいウィンドウが開き、そこにオンライン（4）になっていることを示す明るい白文字で書かれた桔梗の名前を見つける。

『桔梗 ミナト カメリア近郊』

たしかに今話している『ミナト』は桔梗のようだ。……ん？ 桔梗の名前の下にもう一人白文字の人、つまりRF（6）にログインしている人がいる。

『千沙都 チサ カメリア近郊』

千沙都とは、俺の従姉妹で桔梗の同級生であり、重度のネットゲプレイヤーの比与森千沙都のことだ。実家が近く、また高校も同じところに通っているせいで今でもよく遊んでいる。主にネット上で。

『千沙都もRFやってるのか』

『うん。今横にいるよ』

そういえば、千沙都はクローズドベータから参加していると言っていたな。ってことはアイツVR対応のヘッドマウントディスプレイを持っていたのか。まったく、娘に甘い親が羨ましい。

『で、お兄ちゃん。今どこ？』

『どこと言われても……森？』

『それぐらいフレリスト見れば分かるから、座標教えてって言うのっ』

なんだそういうことか。それならそうと言ってくれれば良いのに。すぐにメニュー画面からマップを開く、現在地を示す緑色のポインターの位置を確認する。

『えーつと……H-13だな』

『H-13ね。じゃ、今からチサとそっち行くから、動き回らずに待つててね。良い？』

『はいはい』

未だ俺を方向音痴扱いする桔梗に適当に返事する。

たしかに以前にFRのダンジョンでパーティメンバーと合流しようとして穴に落ちて死んでみんなを困らせたりしたが……あれはもう時効だろ？

第1話 ログイン part 4（後書き）

1 落ちる：回線切断のこと。ログインサーバーが落ちた場合、ゲームにログイン不可能となる。すでにログインしているプレイヤーには影響はない。

2 テル：teel。発信者と受信者にしか聞こえない会話。ゲームによっては『ささやき』『ウイスパ』『対話』等とも言われる。

3 フレリスト：フレンドリスト。フレンド登録するとお互いのフレンドリストに名前が乗り、ログイン状態や大まかな現在地が分かるようになる（ゲームによって仕様は様々）。

4 FR：エフアールと読む。前作の『FRain Onlin
e』の略。

5 オンライン：回線がネットに繋がっている状態。ゲーム内でオンラインという場合は、ログインサーバーもしくは各ゲームサーバーにログインしていることを指す。

6 RF：アールエフと読む。今作の『Re：FRain On
line』の略。

第1話 ログイン part 5

さつき道端で拾った小石を手の中で弄り、人差し指でピンツと弾く。放たれた小石は放物線を描き、カチンと音を鳴らして地面に転がっていた赤色の石に当たった。

「おー」

感嘆の声を漏らす。そのまま地面を眺めていると、ふいに視界の端に羽ばたく鳥の姿が映り、それにつられて空を見上げる。

「おおー」

再び感嘆の声を漏らす。

青い空に浮かぶ白い雲は、頬に当たる風と同じ向きに、形を変えながらゆっくりと流れている。この空をファインダーに収めて学校の奴らに見せれば、間違いなく現実の空と見間違ふことだろう。

凄いいりアリティだ。手に持った小石も、頬に当たる風も、現実の感触とまったく変わらない。むしろ現実よりもしつかりと感触を感じることができるので、こっちの方がより現実に近いのでは？ と錯覚してしまうほどだ。

なるほど。このゲームの出来の良さも多分に含まれるだろうが、これだけのリアルさなら、VR機が数十万と高額なものも、それなのに在庫切れするほどの売れ行きなのも頷ける。俺だって金さえあれば迷うことなく買っていただろう。高校生には到底無理な金額だが「よいしょっと」

足をブラブラとさせて勢いをつけ、大きなキノコから飛び降りる。「つとと。んゝ……本当にファンタジーな世界へ迷い込んだ気分だ」少女のものとしか思えない声が耳のすぐ近くで聞こえる。それは自分の声なのだが、まだ聞き慣れていないせいで他人のもののように思える。

「それにしても、これはモンスターなのか？」

さつきまで座っていたキノコを見上げる。グラフィックが完成さ

れすぎていて、これがただのフィールドのオブジェクトなのか、それともモンスターなのかすら分らない。大抵のモンスターやプレイヤー、NPCなどには頭上に名前と場合によってはHPゲージが表示されるのだが、例外としてこちらがアクションを起こすか、もしくはこちらが近づくまで名前もHPゲージも表示されないものもいる。このキノコの場合、すでに近づくどころか座っているの、後は攻撃してみても反応するかどうかだ。

もしLV^{レベル}の高い敵だったらどうするか……いや、こんな初期のマップに高LVのモンスターが配置されているはずがない。しかし、もし配置されているとすれば、それは完全に運営側の嫌がらせ、トラップだ。そう易々と乗せられて、地面に這いつくばるわけにはいかない。

「とりやつ」

とか考えつつ、武器がないのでキノコにキックをする。人は好奇心に勝てないのだ。

キノコは大きく左右に揺れた後、ポンツと音と煙を出して消える。さあ、鬼が出るか蛇が出るか……。

【サイカはサクラダケ（1）を1つ採取した】

「アイテムかよっ！」

いつの間にか手の中にある小さなキノコを握りしめて叫んだ。なんで採取ポイントがあんなでかいキノコなんだよっ。しかも俺は採取なんてしていない。蹴っただけだ。

【サイカの採取LVが1になった！】

しかも難易度の高いアイテムだったようで、採取LVも0から1に上がってしまった。

武器LVよりも採取LVが先に上がるなんて……。

【称号：キノコ狩り名人を手に入れた！】

「狩ってねーよ蹴ったんだよ！」

なんだこの残念な祝福ログの嵐は……。俺は採集系のLVを上げるつもりはないぞ？ というよりサクラダケ一つ手に入れただけで名人？ 実はこれレアアイテムだったのか？

「……」

名前通り桜色のキノコを見つめる。正直おいしそうには見えない。食用ではなさそうだ。

捨てるのは勿体ないので鞆に仕舞う。あとでNPCが誰かに売りつけてみよう。価値は分からないが小銭にはなるだろう。

そこでふと見下ろした自分の姿に興味を持つ。

そいえば周りにはかり気を取られて、自分のキャラクターを確認していなかった。

さっそくメニュー画面からステータスウィンドウを開き、俺が操作する『サイカ』の全身像を見る。

「うああ……」

口の端からうめき声のようなものが漏れる。

『サイカ』は、俺が思っていた以上に『少女』だった。

絹糸のように細く、サラサラとした長い金髪は後頭部の少し右にずらしたところで纏めて垂らしている。サイドポニーテールというものだろうか。ただ、サイドというほど右には寄っていない。あどけなさの残る大きな瞳は青色と赤色のオッドアイで、薄い唇はうっすらと桜色をしている。その軽く閉じた唇の間からは吸血鬼らしく発達した犬歯がちらちらと覗き見える。肌は透き通るように白く、凹凸の少ない体から伸びた手足はほっそりとしている。

ステータスウィンドウに映し出された『サイカ』を見て、桔梗に似ているなど、ふと思った。髪の色と目の色は大きく違うが、それ以外に類似している点が多いように思える。

「……っ！」

その時、俺はあることに気付いてしまった。それは決して気付いてはいけないことだったのかもしれない。しかし、前述したように人は好奇心に勝てない生き物。大きな背徳感を抱えつつも、俺はそれを実行に移した。

「——なっ!？」

な、なんてことだ……。やはり俺の考えは正しかった。しかしこれは——

「あ、お兄ちゃんいたーっ！」

驚いて声のした方を向く。そこには頭上に『ミナト』と『チサ』と書かれたキャラクターがこちらに向かって走ってきていた。

桔梗は『エルフ[♀]』を選んだようだ。桔梗の操作する『ミナト』はモデルのような体型をした長身の銀髪の美女で、大斧を持っていることからクラスはバーサーカーだろう。

その桔梗の隣にいる千沙都が操作する『チサ』は、動物のような大きな耳と尻尾が特徴的な『獣人[♀]』を選んでいた。両手剣を持っているので近接職か盾職のどれかのようだ。

しかし今の俺にそれを詮索する余裕はない。俺はこの衝撃の事実を桔梗に伝えねばならないのだ。

「大変だ桔梗！」

俺は声を張り上げた。

「なに、どうしたの？」

耳に手を当てて聞き返す桔梗に、俺はさらに声量を上げる。

「このキャラ、見た目桔梗に似てるのに、桔梗よりずっと胸があ——」

「それ以上ゆうなあああ——！」

【ミナトはブラストストライク（2）を発動！】

「ぎゃあああ——！」

桔梗が振り下ろした重量感たつぷりな大斧の一撃を受けた俺は、
強い衝撃とともに後方へと吹き飛ばされた。

……というかこれ、バトルスキル（3）じゃないか！

「いたた……。ちよつと待て！ PK（4）はだめだろ！？」

「セクハラの方がだめだと思うけどっ！？」

桔梗が息を荒くして、大斧を肩に担ぎ、地面に倒れた俺の頭上に立つ。ちなみにPKとはプレイヤーキリングのことで、プレイヤーが別のプレイヤーを攻撃することを言う。

「それにPK宣言してないから、ただ吹き飛んだだけでしょ？」

RFではPKをする場合、一方がPK宣言し、もう一方がそれを受けない限りは成立しないようになっている。たしかに桔梗の言うとおり、俺のHPは減っていない。

「それでもこのリアルさのせいでダメージを受けた気がする……」

よろよろと立ち上がって桔梗と千沙都を見上げる。

……ん？ 見上げる？

「なんで二人ともそんなに身長が高いんだ？ 特に桔梗。お前高すぎだろ」

頭三つ分以上高い桔梗を見て言う。まるで俺と桔梗の立場が逆転したかのようだ。

「そ、そう？ 別にそんなことはないと思う。……た、たしかにすこし身長高めにはしたけど」

「すこし？ いや思いつきりだろ。むしろ身長のパラメーター最大だろ。……ああ、そうか。これが桔梗の理想ってわけか。泣けるっ。」

全て理解した俺が慈しみを込めた優しい声で「仮想の世界だけでも理想的な自分でいたいよな」と言うと、何故か桔梗は顔を真っ赤にして再びブラストストライクを決めるのだった。

第1話 ログイン part 5（後書き）

1 サクラダケ：桜色をしたキノコ。見た目はアレだが味は格別。また染色の素材となる。レア度B。

2 ブラストストライク：両手武器専用バトルスキル。大きく振りかぶった武器を地面へ叩き付け、範囲ダメージを与える。攻撃力B。

3 バトルスキル：戦闘時に使用するスキル。技のこと。

4 PK：ピーケー。プレイヤーキリング。プレイヤーとプレイヤーが闘うこと。RFでは基本PK不可である。

第1話 ログイン part 6

「あ、あやうく初めての戦闘不能にされた相手が妹になるところだったぜ……」

「だからPK宣言してないって言ってるのに……」

別に血も出てない口元を拭いながらゆっくりと立ち上がる。そんな俺を桔梗がめんどくさそうに見つめている。

顔の細かい表情まで再現とは……開発の人、本気出し過ぎだろ。

「で、桔梗。単なるエルフというキャラクターへの好奇心なんだが、そのミナトの身長はパラメーター最大——」

「せ、背の高さのことですが、ちさ達よりも圭さんが小さいんだと思うです」

聞き慣れた残念系口調の千沙都が、俺の声を遮って話に割って入ってきた。

「俺が？ まあたしかに低すぎるとは思うが……。それはそうとして、身長とその体型——」

「エルフはそういう仕様なのです。パラメーターを弄らなかつたらこうなるのです」

千沙都が口調を強めながら詰め寄ってくる。視線を上げるとチサの大きな耳がピコピコと動いている。やばい凄い触りたい。

「わ、分かった。千沙都がそう言うならそういうことにしとく」
こっそり後で確認しておくか。

「さすが圭さん。落ちた物を五秒以内に拾って食べてもお腹壊さない人は格が違います」

「俺は三秒ルール派だ」

千沙都の褒め言葉は相変わらず分かりづらい。横を見ると桔梗がほっとため息をついていた。話がそれで安心しているようだ。

「ところで、圭さんは吸血鬼のギャンブラーなのです。また凄い

種族とクラスを選んだですね」

「凄いつて、なにがだ？」

よく見れば千沙都は、背中に両手剣の他に中型の盾を背負っていた。序盤からこの二つを装備できるのは全クラス中、最も装備できる武器の種類が多い『ラウンダー（１）』しかない。

「ギャンブラーって全クラス中最もお金かかるのですよ？ 武器として使う銃の弾も支援効果を付与するコインも、吸血鬼特有の種族スキル、『血の循環』を発動するのに必要な血液も、どれも消費アイテムです」

「……マジですか」

M M O R P Gで金といえばLV、そしてレア装備の次に重要な要素と言っても良い項目だ。千沙都が言うには、ギャンブラーとはそのとても大事な金を湯水のように消費するクラスなのだという。

「はい。クローズドベータ（２）の時は『道楽クラス』と言われていたです」

道楽クラス……つまり、お金に余裕のあるプレイヤーが、メインに育てていたキャラとは別に新しくキャラクターを作成して気晴らしにプレイする、暇つぶしの的なクラスだということだ。

「使いこなせばかなり強いんですが、クローズドベータでは誰もそこまでいかなかったです」

大器晩成、ということなのか？ とにかく、最初にプレイする時に選ぶようなクラスではないことはたしかのようだ。

「たぶん育てるの苦労しますよぉ」

千沙都がニヤニヤと笑う。

「と言われても、元々このキャラは俺が作ったんじゃないくて、運営の人が特別仕様だと言って用意してくれたものだから……。よし、LV上げに苦労したら苦情を書いてやるう」

俺がそう言っていると、笑っていた千沙都の（チサ）の動きがピタリと止まった。

「運営……もしかしてそのキャラクターって噂の『nNPC』です

か？」

「エヌツーピーシー？ なにそれ？」

「『NPCではないNPC』という意味らしいです。ネットで噂になってるです。どうもRinged World社の社員がリークしたようなのですが」

そう前置きをして、千沙都はnNPCとやらについて話し始めた。
「FRのミッションクエスト（3）って面白いと評判は良かったのですが、プレイヤーがないがしろにされているという不満も大きかったです。正直ちさもそう思っていました。一応ストーリーとしては重要な立ち位置にいるプレイヤーなのですが、どこかNPCと距離があり、疎外感がありました。そのせいでちさにはミッションクエストを心から楽しむことができませんでした」

たしかに千沙都が言うように、俺も前作のFRで同様の思いを感じていた。せつかく盛り上がってきたところなのにプレイヤーは脇役の雑魚を相手にさせられたり、戦闘に勝手に参加してきたNPCが強すぎてプレイヤーはただNPCを後ろから見守るだけだったり、
「。。。のアイテムを取ってこい」と世界中を走り回らされたりと、プレイヤーはNPCに良いように使われただけの、所謂『パシリ君』だったように思える。

「そこでRFではそう言った意見も取り入れ、ミッションクエストに深く関わるNPCの中から、特に重要なNPC一名がチサ達プレイヤーとパーティを組み、一緒に戦い、出来うる限りプレイヤーと行動を共にさせることで、VR対応ということも合わせて、前作以上の臨場感をプレイヤーに与えよう、というものらしいのです」

千沙都の話を静かに聞いていた桔梗が口を開く。

「へえ〜。でもそれだとそのnNPCっていうのは、結局プレイヤーのように動くけどNPCだったことじゃないのかな？」

「はい。nNPCには特別なAIを搭載してプレイヤーに近づけるそうなのですが……ネットの噂ではまだそのAIが完成していないようで、今のところは実際に運営の誰か、おそらくバイト君が動か

すことになる、と言われているです。これが事実だとすると、そのNPCの中の一体を、圭さんが操作している、ということになるです」

「なるほど。それで特別仕様のキャラクターなわけだな」

「NPCとしてミッションクエストに関わる重要なキャラクターだから、予め見た目や種族、クラスが決まっていた、というわけか。」「実際、吸血鬼のキャラクターエディットには、オッドアイはあっても赤と青のオッドアイはなかったはずですよ。特別仕様なのは間違いないです」

そう言われると、途端に『サイカ』が凄いキャラクターに見えてきた。すいません、金食い虫クラスだとは思って。

「ん……？ でも待てよ。俺のキャラクターがミッションクエストの重要人物だとして、プレイヤーのみなさんのミッションクエストに参加するとする。ここまでは良い。だが、クエストは人によって、はまったり手を付けなかったり、後からまとめてやったり、実装されたらすぐに攻略したりと、プレイヤーによってその進行度合いに大きく差が出る。その辺りはどうするのだろうか。」

「なあ、千沙都」

「はい。なんですか？」

「俺がそのNPCだとして、千沙都和桔梗のミッションクエストに同行するとする。この場合、千沙都和桔梗のミッションクエストは進行するわけだが、それ以外の人はどうするんだ？ まさか俺が全てのプレイヤーについていくのか？」

俺がそう質問すると、千沙都は顎に手をあてて「んー」と唸った。「……ああ、それについても書いてあったです。NPCとして存在するのは基本的に各国に一名ずつ。それを『オリジナルNPC』と呼ぶそうですが、さっき圭さんが言ったみたいに、ちさ達と圭さんでミッションクエストをクリアした場合。それ以外のプレイヤーには、そのプレイヤー専用のNPC、これを『クローンNPC』と呼ぶそうですが、それを連れてミッションクエストを進行するこ

とになるのだそうです。クローンnNPCはミッションクエストを進行する際に現れて、オリジナルnNPCとほぼ同じ行動を取るの
で、クローンでも遜色なく楽しめるのだそうですよ」

「なるほど。俺が全てのプレイヤーを相手する必要はないのか」
ほっと胸を撫で下ろす。

いくら重要な役どころだからと言っても、俺もLV上げやLV上げやLV上げがしたい。キノコ蹴って採取LV上げる以外にも、モンスターを狩ってギャンブラーのLVを上げたい。

あれ、LV上げしか言っていないような……。
そんなことを考えていると、

「ところで、ふと思ったんだけど、そういう重要なことってお兄ちゃんのシステムヘルプ辺りに書いてあるんじゃないの？」

桔梗がそう言っ
て俺に視線を向けた。

……そういえば、

『特別仕様等についてはログイン後のシステムヘルプに記載していますので、そちらをご覧ください、それでも何か質問等あればGMまでご連絡下さい』

昨日の運営の人の言葉を思い出す。

慌ててメニュー画面を操作して、システムヘルプウィンドウを開く。

項目に目を走らせていくと、さっき聞いたばかりの単語が目に入
った。

『nNPCについて』

「……あつた」

「やっぱり……」

頭を押さえた桔梗は、今日一番のためいきをついた。

第1話 ログイン part 6（後書き）

1 ラウンダー：両手剣、鎌、片手剣、短剣、弓、中型盾を装備可能なクラス。中型盾を装備すれば盾職。両手剣、鎌を装備すれば近接職。弓を装備すれば遠隔職と、どんな立ち位置もこなす。

2 クローズドベータ：オープンベータの前に行われる無料でゲームができるテスト運営期間。大抵は抽選を行い、当選した一部のプレイヤーのみがプレイできる限定的なものである。また、ほとんどの場合はゲーム自体もまだまだ未完成のことが多い。

3 ミッションクエスト：通常のクエストとは違い、ゲームの物語に大きく関わる重要なクエストのこと。

第1話 ログイン part 7

「で、お兄ちゃん、どこまで読んだの？」

モンスターがドロップした木の枝に火打石で火を付け、これまたモンスターがドロップした羊の肉を大斧の刃先に載せて焼く桔梗。妹よ、いつからそんなにアウドドアになった。

「あと少しで一通り目を通すといったところ」

システムヘルプに目を走らせつつ応える。

千沙都がネットで仕入れた情報は、その全てが怖くなるほどに合っていた。本当に関係者が情報をネット上へリークしたのかもしれない。

システムヘルプに書かれていたことをまとめると、次のようになる。

『サイカ』はカメラリア皇国のミッションクエストで最も重要なキャラクターであり、プレイヤーと行動を共にする『NPC』である。その『NPC』であるサイカは、通常は他のプレイヤーと何も変わらず普通にプレイすることができるが、ミッションクエストが開始されると、『サイカ』はプレイヤーではなくNPCとしてミッションクエストに参加することになる。ミッションクエストのイベント中は操作不能となり、イベントに沿って勝手に喋り、勝手に動き、ミッションクエストのNPCの一員として行動する。イベント以外はプレイヤー自身が操作することができ、さらにミッションクエスト限定で特殊なバトルスキルや、クラススキルが使用可能となる。また、プレイヤーはNPCがクリアした、又はクリア途中のミッションクエストまでしか進行できない。そのため、『サイカ』は早めにミッションクエストを進めること。ミッションクエストをスムーズに進行できるよう、以下の二つのアイテムを特別に支給する。悠久の弾丸、無限のコイン【ランダム】。

……そんな物あったか？

一通り目を通し終えたシステムヘルプを閉じながら思案する。そういえば、サクラダケを鞆に仕舞いはしたが、鞆の中身を見た覚えはなかった。

さっそく鞆の中を漁る。とは言っても、それはアイテムウィンドウを確認するという行為だ。

「あ、あった」

アイテムウィントウの隅の隅。最下段にそれはあった。悠久の弾丸 $\times \infty$ （1）と無限のコイン【ランダム】 $\times \infty$ （2）。どちらも数の減らないアイテムのようだ。これでギャンブラーの主力武器『短銃』が弾切れをおこすことはないし、クラススキルのツアッブ（3）も使い放題だ。ただ、悠久の弾丸は攻撃力が1と低く、無限のコインも効果がランダムで発動するようだから、どちらも常時使えると言うものではない。雑魚狩り用といったところか。まあ、ないよりはマシだろう。

鞆にはその二つ以外にもいくつかアイテムが入っていた。胴装備のヴァンパイアコートに脚装備のヴァンパイアハーフパンツ、腕装備のヴァンパイアグローブに足装備のヴァンパイアロングブーツ。そして片手剣のステイレットと短銃のリボルバー。

武器は良いとして防具の名称はなんなんだ。種族が吸血鬼だからヴァンパイアと付けたいくなるのは分かるが、初期装備なんだからシンプルにコートとかグローブでも良かった気がする。どっちでもいいけど。

さっそくそれらを装備する。アイテムウィンドウの横にステータスウィンドウを開き、各装備部位にある四角いマスへ該当するアイテムをドラッグしていく。ステータスウィンドウに映るインナーだけを着たサイカの姿が、右手に短銃、左手に片手剣を持ち、紋様が入った茶色のコートと、白のローライズのハーフパンツ、そして黒のロングブーツを履いた姿へと変わる。個人的にはかなり好みの格

好になったのだが……このコート、裾が前から後ろへ少しずつつ長くなっていくモーニングコートのようなデザインをしていて、さらにローライズのハーフパンツを履いているせいでヘソがちらちらと見えるようになっていいる。正直ちよつとエロい。妹にどことなく似ているからなおのことエロい。変態？　いいえ俺は男子としてかなり健全だ。たぶん。

それよりもこのハーフパンツ。全然太もも隠れてねーよ。戦士（戦う者という意味で）なら脚守れよ。まったく、これから世界を救おう（たぶんそんなストーリーははず）っていう奴がこんなオシヤレ装備なんかしやがって……。

見た目良いから許すけど。

最後にステータスウィンドウ下段にある適用ボタンを押す。すると俺の体が一瞬消え、次現われたときにはステータスウィンドウに表示されていたサイカと同じ格好になっていた。

「やっぱり……。ギャンブラーだけ装備がないのはおかしいと思ってたんだよね」

いつの間にか、さっきまで桔梗が焼いていた羊の肉が『マトンのグリル』という食事アイテムに変化していた。桔梗はそれをもつしやもつしやと食べている。

たしか肉料理には攻撃力アップの効果があつたはず。手軽に作れる攻撃職用の食事アイテムのようだ。

「俺もまさかとは思つたが、まさか装備されず鞆に仕舞つてあるなんてなあ」

「えゝ、普通まずは鞆の中に何か入っていないか見るんじゃないの……?」

ごもつともです。

ちなみに桔梗と千沙都の二人は近接職なので鎧を着ている。鎧と言つても全身を鉄製のプレートで覆うようなものではなく、要所所にプレートを配置した比較的軽装の鎧だ。そしてやっぱり二人とも太ももは出ている。だから守れつて。

桔梗とやりとりをしていると、突如ファンファールと派手なエフェクトを伴ってシステムログが流れた。

【サイカのLVが5になった！】

「早ええよ！ 俺まだ何もしてねーよ！」

システムヘルプを読んで武具を装備しただけでLVが1から5に上がってしまった。

もちろんこれはチートとかそういうものではない。俺と桔梗と千沙都でパーティを組み、俺がシステムヘルプを読んでいる間に二人がモンスターを倒してくれていたのだ。そのおかげで何もしていない俺にも経験値が降ってきたというだけだ。

ちなみに今桔梗がここにいるのは、スタンバイモードにして疲労を取るためだ。RFではアクティブモード、つまり武器を構えた状態で敵と戦っていると疲労が溜まっていき、それが一定以上蓄積されるとステータスにマイナスの補正が入るようになっていく。この疲労は、武器を仕舞ってスタンバイモードになり、敵と接触せずスタンバイモードを維持することで取れるようになっていく。このスタンバイモード時にはHPとMP、そして少し時間を置けば状態異常も回復するので、回復職がいない時やソロで狩りをしている時は重宝する。

「さて、俺もそろそろ初戦闘といくか。桔梗、疲労取れたか？」

「うん。ちょうど今全快したところ」

「そんじやためしにやってみますか！」

桔梗を連れて千沙都の元へ向かう。

【サイカはリロード（4）を発動！ 短銃に弾が込められた】

走りながら『リロード』を使用する。短銃にもよるが、このリボルバーという武器の場合は6連発仕様のようだ。6発撃つ度に短銃専用スキルの『リロード』を使用しないといけない。忘れて空撃ちなんてかつこ悪いことはこの二人の前では出来ないからな。

「圭さん、もう読み終わったのです?」

モンスターにとどめを差しながら千沙都が振り返る。

「ああ」

「ちょうど良かったです。両手剣のLVがクラスLVに追いついたので、武器を変えたかったところなのです」

そう言つと千沙都は両手剣から片手剣と中型盾に武器を変更した。

「ちさが盾をするので、桔梗と圭さんで敵を削って下さいです」

「りょーかい。あ、HP減ったら下がって回復しろよ。まだコインがこれしかなくて、何が出るか分からん」

俺はツアップを使用する。

【サイカはツアップを発動!】

コインを親指で上空へ弾き、短銃で狙いを付けて撃ち抜く。

【表。効果アップ! パーティメンバーに攻撃力アップの効果】

三人の右手に赤色のエフェクトが現われる。

「わあー。なんか強くなった気がします」

「気がするだけかも」

「気がするんじゃないかって強くなってるんだよ!」

左手の片手剣を持ち直し、アクティブモードにする。

「敵の指定は千沙都に任せる」

どの敵を攻撃するのは盾職に任せるのが一般的だ。

「はい。それではいきますよー。『ハイフォレストシップ、いつまでママのスカートに隠れるんだい? (5)』」

【チサは挑発を発動! フォレストシップに挑発の効果】

「なんだよその挑発 (6) のセリフ!?」

そんなこんなで、RFへ来て初めてのLV上げが始まった。

第1話 ログイン part 7（後書き）

- 1 悠久の弾丸×∞：銃専用消費アイテム。支給品。トレード不可。売買不可。攻撃力1。
- 2 無限のコイン【ランダム】×∞：ツアアップ専用消費アイテム。
- 3 ツアアップ：コインを消費して、自身及びパーティに様々な効果を付与する。ギャンブラー専用クラススキル。
- 4 リロード：短銃に弾を込める。短銃専用スキル。
- 5 ヘイ：FFXIIクロースドベータより。
- 6 挑発：パラディン、ディフェンダー、ラウンダー専用スキル。敵一体の攻撃対象を自分に固定する。

第2話 ログアウト不能 part 1

リロードしながら視界の左上に見えるHPとMP、そしてスキルポイント、通称SPのゲージを確認する。敵に攻撃をすることによって貯まり、バトルスキルを発動することによってその全てを解放するSPは、貯まったポイントに比例してバトルスキルの効果を上昇させる効果を持つ。たとえば短銃のバトルスキル『ブレイクショット（1）』は、対象にダメージを与えつつ、強制的にメインウェポンを素手にする『ウェポンブレイク』の効果があるのだが、SPはこのウェポンブレイクの成功率、持続率に影響を与える。

今のSPは560/1000。これだけ貯まれば充分だ。

「ブレイク撃つぞ」

「わかった！」

横目で桔梗がブラストストライクの準備に入るのを確認してから、ボーンウォーリアーに狙いを定め、ブレイクショットを発動する。

【サイカはブレイクショットを発動！】

短銃から二発の弾丸が発射される。弾丸はわずかに左右にブレながら、やや遅い速度でボーンウォーリアーへと飛んでいく。

【サイカのブレイクショットの効果発動！ ボーンウォーリアーにウェポンブレイクの効果】

狙い通り見事命中。ボーンウォーリアーが武器を落とした。

「ほいっと」

すかさず千沙都が防御を解き、シールドブロウ（2）を発動。

盾で強打し、ボーンウォーリアーを気絶させる。

「ガイコツはお化け屋敷だけで充分なのっ」

桔梗のブラストストライクがボーンウォーリアーの脳天に直撃。

勢いを失うことなく地面に突き刺さった大斧の傍らには、見るも無惨な姿に成り果てた骨の残骸が転がった。

【ミナトはボーンウォーリアーを倒した！】

【サイカのLVが10になった！】

【ミナトのLVが10になった！】

【チサのLVが10になった！】

ファンファーレが立て続けに三つ鳴り、三人同時にLVが上がったことを告げた。

あれから一時間半。クローズベータをやっていた千沙都の助言もあり、思った以上に早いスピードでLVを上げることが出来た。クローズベータの時は別の国でやっていたらしい千沙都だが、初期マップに配置される敵はだいたいどこも同じ。「LV10手前ならボーンウォーリアーがお勧めです」と言う千沙都に従い、狩り対象をフォレストシープからボーンウォーリアーに切り替えひたすらガイコツを狩ったところ、面白いようにLVが上がっていった。

おかげで早くもLVが二桁に突入したが、武器も防具も著しく消耗してしまった。少し前から狙いを付けづらくなっているし、攻撃力も落ちている。一度修理したほうが良さそうだな。

「一度街に行くか。武器を修理しないと」

「そうですね。ちょうどちさも盾がぼろぼろになってきたところで」

「カメラリアの街がどんどこか、見てみたいしね」

全員の意見が一致。ということで街へ向かうことにした。

「ああそうですね。LV10になれば新しい装備があるです。修理せず新しい装備を買う方が良いです」

盾を背中に、片手剣を腰の鞘に収めながら千沙都が言う。

「もう装備変えるのか。さすが低LVは装備の買い換えが早いな」
まだ二時間も使っていないのにさよならか。少し勿体ない気がする。

「本当はもつと小刻みに、だいたいLVが3か4上がる毎に新しい

装備があるです。ですがそんなに毎回買い直してはお金がいくら合っても足りないです。だから、狩り場を大きく変えるときに装備を変えるのが良いです。LV10からは一つ先のマップで狩りをするので買い直すと良いです」

この一時間半で溜まった所持金は1280リナール。一応クロースドベータの情報をまとめたサイトには目を通してるので分かる。これだけじゃ全ての装備を買い変えることは出来ない。

「金が足りないなあ……」

「お金なら骨くずを売れば、装備代くらいにはなりますよ？」

「え、この骨くずそんな良い値段で売れんの？」

ボーンウォーリアー唯一の戦利品、骨くず。結構な数を狩ったのでそれなりの数を三人が均等に持っている。具体的には2ダースほど。これが金になると？

「はい。細工師のLV上げに使われるです。たぶん細工ギルドにたくさん人がいると思うので、そこで売れば即売れです。ボーンウォーリアーを選んだのは、たしかに経験値も美味しいですが、それ以上に良いお金になるからなのです」

さすがクロースドベータをプレイしたお方は格が違っぜ……。ドロップアイテムにまでこだわっていたとは。

「ギャンブラーはお金がかかると言いましたが、実はラウンダーもお金がかかるです。装備できる武器の種類が多いことが売りのクラスですが、基本盾職なので、攻撃職と違って武器よりもまずは防具と盾を揃えるのが先決です。その後武器なのですが、種類が多すぎて、全部揃えてたら破産するです。だから事前にどの武器を使うか絞って、それだけを買って使っていくのがラウンダーの今のスタンダードな育て方なのです。まったく、装備にお金のかかるクラスですよ」

ヤレヤレと言いたげに肩を竦める千沙都。

だったらなんでそんな金のかかるラウンダーにしたんだ？ そう聞こうとしたが、すぐに言葉を飲み込んだ。おそらく千沙都は俺と

桔梗が盾職をやらないと踏み、さらにはどんな構成でも穴が埋められるようにとラウンダーを選んだのだろう。千沙都は優しい奴だ。きつとクラスを選択するときにそう考えたに違いない。

それなら余計なことは言わず、千沙都もこのゲームを楽しめるようにすることが、昔から千沙都を妹と同じように可愛がってきた俺の役目だろう。

「へえ。ってことはどの武器LVを上げていくか決めているのか？」

「はい。盾と片手剣、それと両手剣です」
「たった3つだけか？」

それだと多彩な武器が売りのラウンダーにした意味がないような。3つだけです。もちろんこれには意味がありまして、ラウンダーはLV30まで上げると『武器特化』というクラスクエストが発生するです。ここで武器を3つに絞ると、それぞれの武器の本職に迫る性能へ引き上げることが出来るです」

つまり、使える武器は少なくなるが、盾はディフェンダー並に、片手剣はパラディンやフローワー並に、両手剣はバーサーカーやダークナイト並に扱えるようになり、攻撃職、盾職のどちらも本職並にこなすことができるようになる、ということなのだろう。たしかにそう考えれば、武器の数は少ないなれどラウンダーというクラスになった意味は十分ある。

「先を見据えてるんだな」

家計簿とかつけると貯金が凄くたまりそうだな。

「先を見据えているという意味ではみなさんも同じです。ギャンブラーは所持金に余裕が出てくる後半になれば攻撃力の高い弾丸が使えて攻撃職になれますし、バーサーカーも物理攻撃という一点に特化したクラスですから、後半の堅い敵には非常に有利に戦えるです」
しかも褒め上手。結婚した旦那さんはさぞ出世するだろう。

森の中を歩き続けてしばらくした頃、突然目の前が開けて見えたのは、大きく高い城壁だった。

ここがカメリア皇国の首都。皇都カメリアのようだ。

カメリアの城下町へと繋がる城門の前には、多くの人で人だかりが出来ていた。よく見ると次から次へと人が湧いている（3）。どうやらこの人だかりはログインしてきたばかりのプレイヤーのようだった。

「あの城門前のあたり、やけにプレイヤーが湧いてるな」

「カメリアを出身国に選んだ場合は、あの城門前が出发点ですから」「俺は森の中だったぞ？」

「混雑回避のため、一部のプレイヤーはランダムで首都近郊のマップのどこかに出发点を変えられるそうです。ちさも桔梗も城門前ではなかったです」

それであんな森の中にポツンと俺一人だけいたのか。納得。

……ん？　そういえばこの二人は、なんで俺がカメリアを選んだことが分かったのだろう？　俺がログインしたのは9時を少し回ってからのこと。ログインすると数分も経たないうちに桔梗からテルがきたということは、少なくとも俺がログインしてから二、三分後にはログインしていたことになる。二人には俺がカメリアから始めることは教えていない。というかNPCのせいでカメリアだと知ったのは治療に入った後のことだ。

「二人はなんで出身国をカメリアにしたんだ？」

俺がそう言うと、二人はきょとんとしたあとに、

「なに言ってるんですか。圭さんがカメリアを選んだからじゃないですか。ここ、あまり人気ないのに」

千沙都が少し呆れた顔をして俺にジト目を向ける。

「いや、俺がログインしたらすぐ桔梗からテルがきたんだよ。前もってカメリアと決めてもしてないと、そんなに早くログイン出来ないだろ？」

「もちろん決めてたよ。お兄ちゃんだけ一日早くログインしてキャラクター作成できるって聞いてたから、公式サイトフレンドリストで、お兄ちゃんがどこにキャラクターを作成したのかを確認したの。それでカメラリアにサイカってキャラクターを作成してたのを見て、すぐに千沙都にもチャットで伝えて、カメラリアにキャラクターを作ったんだよ」

「クローズドベータの情報があつたので、ちさも桔梗もキャラクター作成自体はすぐに終わったです」

「そういうことだったのか。ログインはできなくても公式サイトで確認できたのか。」

「ところで、なんでカメラリアって人気ないんだ？」

千沙都がぼろっと漏らした言葉を俺は聞き逃さなかった。

「経験値もドロップするアイテムも美味しいカニがないからです」
「なるほど」

カニか……。タラバか、毛ガニか。そこが重要だな。

「もちろんそのカニは赤いよな？」

「いえ、緑ですよ？」

「……食用ではないな、うん。」

第2話 ログアウト不能 part 1（後書き）

1 ブレイクショット：短銃専用バトルスキル。敵の武器及び手を狙って撃ち、ウェポンブレイクの効果を与える。攻撃力D。

2 シールドブロウ：盾専用バトルスキル。対象を強打して気絶させる。攻撃力D。

3 湧く：そこにいなかったプレイヤーやモンスター、アイテム等が新たに出現すること。プレイヤーの場合はログインしたことが同義である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6577y/>

Re:FRain Online

2011年11月24日12時24分発行